

言葉は「人格」である

読売新聞社特別編集委員

橋本 五郎

一国の首相の漢字能力がこれほど問題になったことがかつてあったろうか。漢字が書けなくなったと言われて久しいが、それでも読むことはできるといのが、ある種の救いでもあった。それなのに「踏襲」を「ふしゅう」、「詳細」を「ようさい」、「未曾有」を「みぞうゆう」……。嗚呼。

しかし、笑つてばかりもいられない。自分たちは本当に言葉を大事にしているのか。自覚的に使っているのか。そう問われれば、考え込まざるを得ないからだ。

読売新聞で「新日本語の現場」と題する企

画を始めたのは二〇〇二年のことである。胃癌で胃の全摘手術を受け、編集委員として復帰し書いたコラムがきっかけだった。それは「思想」（岩波書店）という八十年もの伝統ある雑誌の座談会で、「立ち上げる」が三十数回も使われていたことを強く批判する内容だった。

「国学を立ち上げた本居宣長」「ハイデガーの場合『存在と時間』のなかにナショナルなものを立ち上げていく」……。思想を論ずるのにこんなにまで無神経に多用していいのか。この座談会に限らない。「審議会を立ち上げる」「保育園を立ち上げる」などとNHKのニュース

でも平気で使っている。日本語にはもつとふさわしい言葉があるだろう。表現力の貧困さ以外のなにものでもないだろう。そういう趣旨だった。

これに対し、手紙やメールが殺到した。一人一人に返事を書けなくなり、それでは新聞社を挙げてチームを作つて連載を始めよう。そう思つて最初に組上に乗せたのは、若者言葉やファミレス言葉だった。「支店とかに連絡とかしておきましょうか」「千円からいただきます」「チョーおもしろい」……。

その後、テレビや学校現場の言葉、マニュアル

用語、さらには方言の魅力など今を象徴する言葉を取り上げ、日本人や日本社会の変化を掘り下げて考えてみたいと思つたのである。多くの反響から多くの人が日本語に関心を示し、憂えていることが分かった。

新聞記者になつて四十年近くなる。言葉は単なる伝達手段ではなく、使う人の人格を示すものであることを痛感している。日本では政治家の演説はあまり重要視されないが、米次期大統領オバマ氏の演説の喚起力をみれば、「言葉の力」を実感せずにいられない。

私は読売新聞の読書委員を十年以上務めているが、書評を書くにあたっては、「二回半読む」ことを自らに課している。一回目は赤鉛筆で線を引きながら読み、二回目は赤線部分を抜き書きしながら読む。そして三回目は、メモ（時にA5用紙で三十枚になることもある）を読み返しながら、書評の執筆に入る。

何よりも大切なのは、著者が何を言おうとしているのかを正確に知ることである。虚心に読めばその著書の全体像が見えてくる。書評をしていて嬉しいのは著者からの手紙である。

『目安箱の研究』（創文社）の書評に対して、

立命館大学教授の大平祐一さんからは「妻と娘は私がどんな研究をしているのか、今朝の書評でよく分かつたようです」という手紙をいただいた。作家の津村節子さんの作品を二回取り上げたことがある。小説『土恋』（筑摩書房）と、夫の吉村昭さんとの歩みを描いたエッセー『ふたり旅』（岩波書店）である。津村さんからのお葉書には「私の意図を正確に理解していただいてありがとうございます」とあった。

新聞に書く場合も、テレビで話す時にも心がけているのは「わかりやすく、ためになつて、おもしろい」ということである。どんな文章でも中学生やお年寄りにもスーと頭に入る分かりやすさがなければいけない。

しかし、ただ分かりやすいというだけでは十分でない。お陰で勉強になったと思われることが必要だ。そして、知的好奇心を刺激されるようなわくわくするエキサイティングな面白さがなければならぬ。

三つの条件を満たすのは容易なことではない。日暮れて道遠ではあるが、自覚的に使つてこそ言葉は生き生きと魅力を発揮すると思うのである。



橋本 五郎（はしもと ごろう）

1946年、秋田県生まれ。

読売新聞社論説委員、政治部長、編集局次長、編集委員などを経て、現職。ニュース解説者としても活躍している。著書に、『橋本五郎の「どうなる日本!」』（弘文堂）、監修書に「新日本語の現場」（中央公論新社）シリーズなどがある。